

# 近江のまつりの今とこれから

—「文化・経済フォーラム滋賀」提言研究の取り組み—

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤

賢治

近江のまつりの今とこれから  
—「文化・経済フォーラム滋賀」提言研究の取り組み—

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

## はじめに

近江（滋賀県）は、長浜曳山祭、大津祭、日野祭などの曳山行事と日吉山王祭、瀬田の船幸祭など、湖国を代表する規模の大きな祭礼行事から、農村集落の鎮守の祭り、地藏盆をはじめとする各種の盆行事、オコナイや山の神などの民間信仰に基づく行事など、各地域に伝わる伝統的な民俗行事の宝庫である。それらの行事に共通して顕著な問題として、資金や担い手の不足、古い慣習による足枷などが原因となっており、それらの継続、存続が危ぶまれ、二〇二〇年のコロナ禍以降、拍車がかかっている。

「文化・経済フォーラム滋賀<sup>〔註1〕</sup>」では、その現状を把握し、未来へ向けて「提言」をすべく、二〇二二年度にアンケート調査を実施し、博物館学芸員や大学の研究者などの有識者に見解を聞いて意見交換をする「文化・経済サロン<sup>〔註2〕</sup>」を二回実施。そしてアンケート調査とサロンの結果を踏まえて「文化ビジネス塾（シンポジウム）<sup>〔註3〕</sup>」を開催した。その現状から、祭礼等の民俗行事の行く末を考察した。

## 第一章 アンケート調査の実施

## アンケート調査の実施方法

まず、アンケート調査の対象とする祭りの定義については、「まつり」と表記することにし、曳山行事などの規模の大きな祭礼から、鎮守社を核に農村集落で組織された大小の宮座の祭礼、寺院で行われる浄土真宗の報恩講や、地藏盆や念仏踊りをはじめとする各種の盆行事、オコナイや山の神などの民俗行事を含むとした。

アンケートを行う地域的な範囲は、当初、都市部や農漁村などが散在する大津市などに限って行う考え方もあったが、二次元コードを利用して、Google フォームで回答を回収する方法を検討する中で、滋賀県文化財保護課の民俗担当者である矢田直樹氏に協力をお願いし、県内の市町の民俗担当者に呼びかけを行い、広く県域で実施することとした。

五月から六月にかけて、アンケート内容を精査し、七月初めから八月末までを回答期間として、県内十九の市町の民俗担当者に依頼文を配布し、各市町の「まつり（祭礼行事と民俗行事）」の担当者にアンケート用紙を配布する形で実施した。



## アンケート調査結果

アンケート調査の結果を以下に報告する。調査結果の分析は、成安造形大学附属近江学研究所研究員の田口真太郎氏の協力を得た。

以下がその報告となる。

### 「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査結果報告

作成…二〇二五年九月十日 成安造形大学 田口

#### 一・調査の目的

文化・経済フォーラム滋賀では、令和七年度の提言研究として「近江のまつりの今とこれから」をテーマに調査研究を進めている。本アンケートは、各地域の「まつり」を担う自治会や保存会の現状を把握し、持続可能な継承の仕組みを考える基礎資料とすることを目的とした。調査は令和七年七月から八月にかけて実施した。

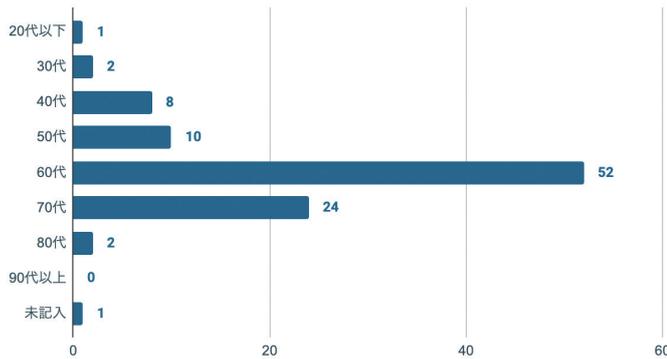
#### 二・回答者・祭りの基本属性

##### 回答者数

一〇三名

##### 回答者の年代分布

- 六十代（五十二名）、七十代（二十四名）が大半を占め、担い手世代の高齢化が顕著。
- 四十代以下は十一名にとどまった。

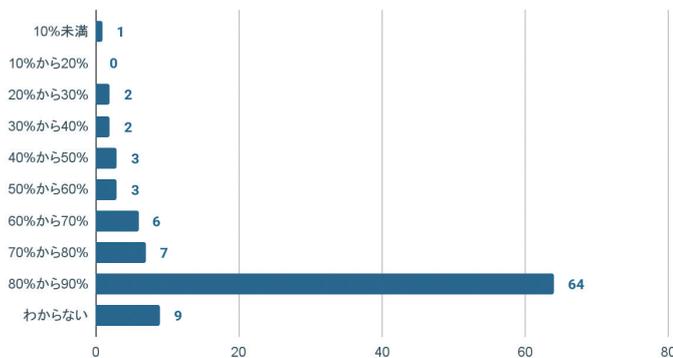


回答者の年代分布

##### 自治会加入率

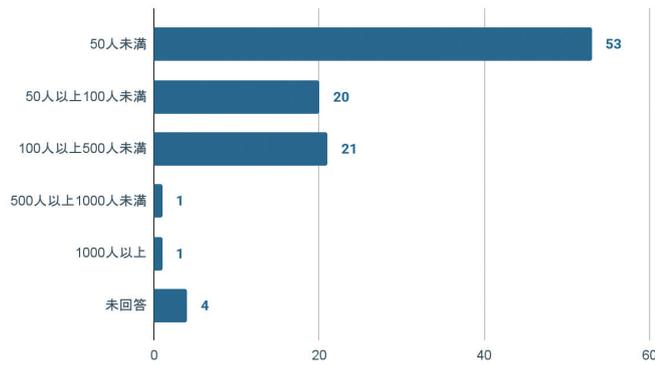
- 八〇〜九〇％…六十四件と最も多い
- 六〇〜八〇％…十三件
- 五〇％未満…六件
- 「わからない」…九件

地域によって加入率に大きな差があり、住民意識のばらつきが浮き彫りとなった。



自治会加入率

祭りの規模



祭りの規模

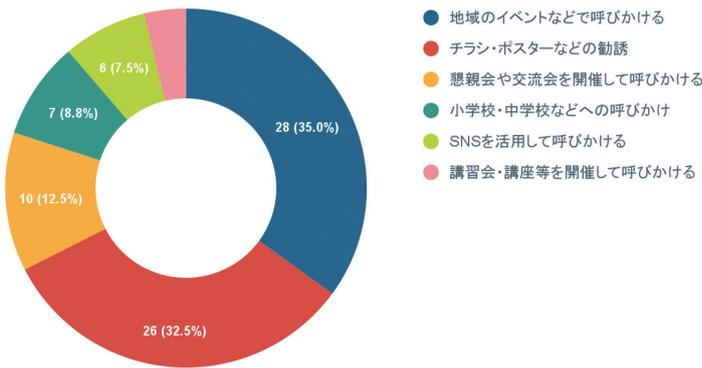
- 五十人未満…五十三件
  - 五十～一〇〇人未満…二十件
  - 一〇〇～五〇〇人未満…二十一件
  - 五〇〇人以上…二件
- 多くは小～中規模の祭りであることが分かった。

三：運営体制と課題の見える化

参加者確保の方法

- 地域イベントでの呼びかけ…二十八件
- チラシ・ポスター…二十六件
- 懇親会・交流会…十件
- 学校への呼びかけ…七件
- SNS…六件
- 講習会…三件

従来型の呼びかけが中心で、若年層や新住民を取り込む新しい工夫はまだ限定的である。

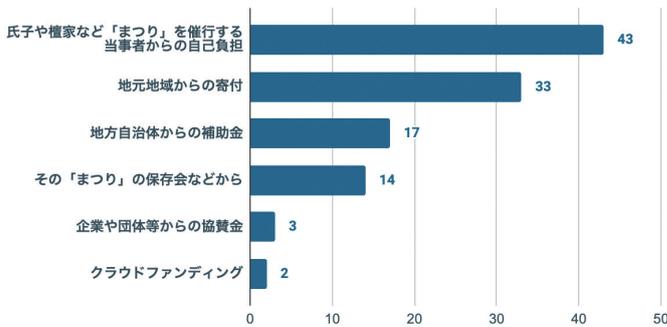


参加者確保の方法

資金調達の方法（複数選択可）

- 自己負担（氏子・檀家）…四十三件
- 地域寄付…三十三件
- 自治体補助金…十七件
- 保存会…十四件
- 企業協賛…三件
- クラウドファンディング…二件

資金面では自己負担と寄付への依存が強く、外部資金の活用は限定的である。

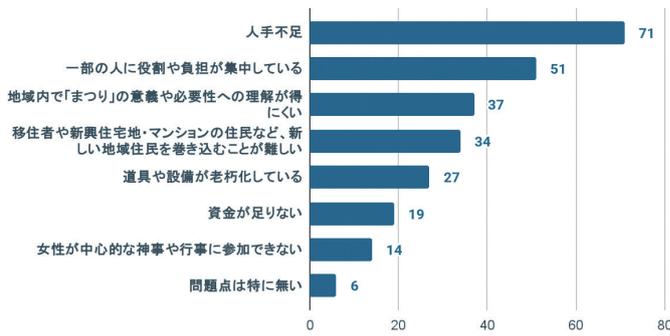


資金調達の方法（複数選択可）

課題の頻出ランキング（複数選択可）

- 一： 人手不足（七十一件）
- 二： 役割・負担の集中（五十一件）
- 三： まつりの意義への理解不足（三十七件）
- 四： 新住民の巻き込み困難（三十四件）
- 五： 道具・設備の老朽化（二十七件）
- 六： 資金不足（十九件）
- 七： 女性の参画制限（十四件）
- 八： 問題なし（六件）

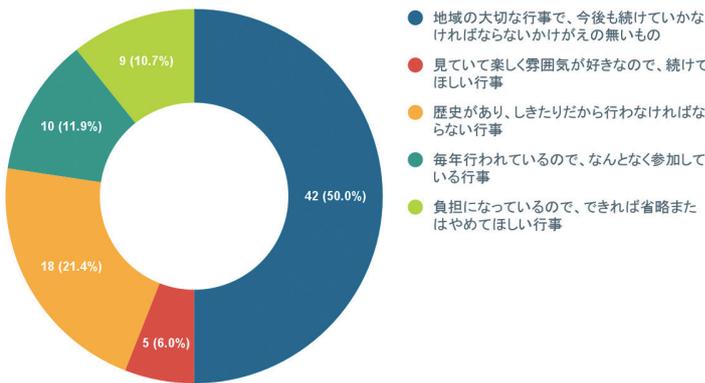
新住民の巻き込みが大きな課題として現れた。  
人手不足と負担集中が突出し、次いで理解不足や



課題の頻出ランキング（複数選択可）

祭りの価値観と未来像

- 地域の大切な行事で今後も続けるべき…四十二件
  - 歴史・しきたりだから続ける…十八件
  - なんとなく参加…十件
  - 雰囲気が好きで続けてほしい…五件
  - 負担なので省略・やめたい…九件
- 半数近くが「かけがえのない行事」と位置づける一方、「しきたり」「なんとなく」「負担感」など多様な意識が併存している。

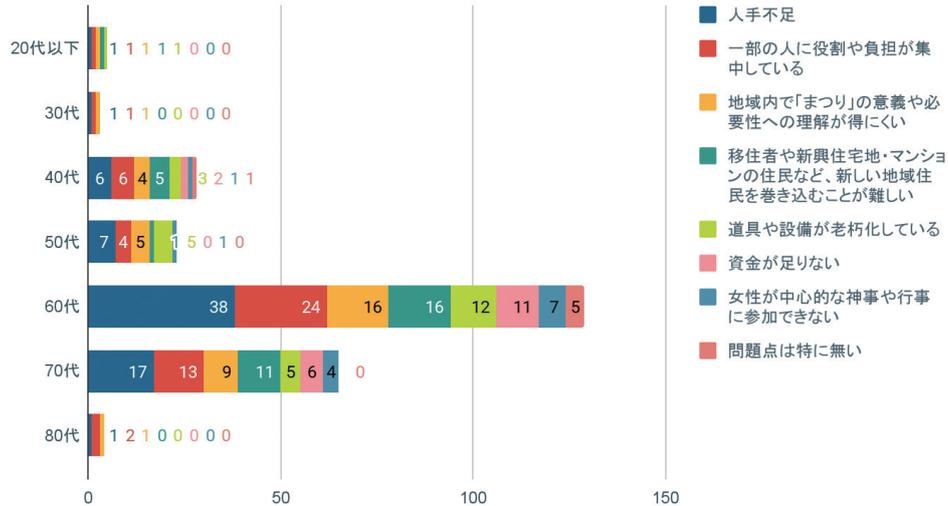


祭りの価値観と未来像

クロス分析の結果

A. 年代×課題

- 六十代（回答者の過半数）
  - 人手不足（三十八件）、負担集中（二十四件）、理解不足・新住民巻き込み（各十六件）が多い。
  - 「資金不足」（十一件）や「女性参画制限」（七件）も他世代より多く顕在化。
- 七十代
  - 人手不足（十七件）、負担集中（十三件）、新住民巻き込み困難（十一件）が目立つ。
- 四十代・五十代
  - 四十代…人手不足（六件）、負担集中（六件）に加え、新住民巻き込み困難（五件）。
  - 五十代…人手不足（七件）とまつりの意義や必要性（五件）、道具老朽化（五件）が同程度に課題。
- 若年層（二十～三十代）
  - 回答数が少ないが、ほぼ全ての主要課題を一件ずつ挙げており、担い手不足や理解不足を認識。
- 八十代以上
  - 回答は少ないが、人手不足（一件）、負担集中（二件）が指摘されている。



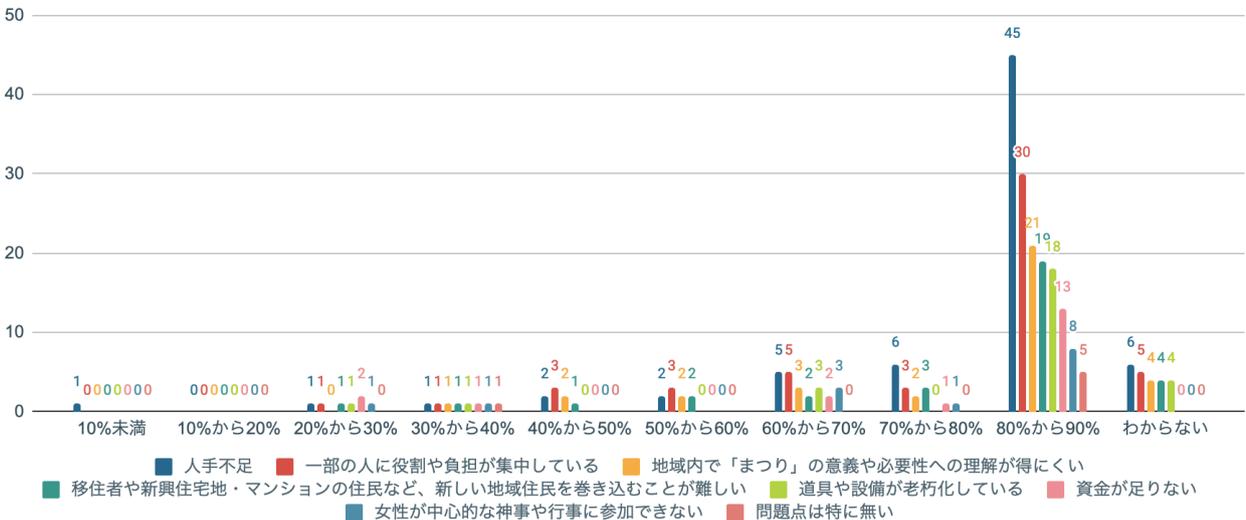
クロス分析の結果 (A. 年代×課題)

**B. 自治会加入率×課題**

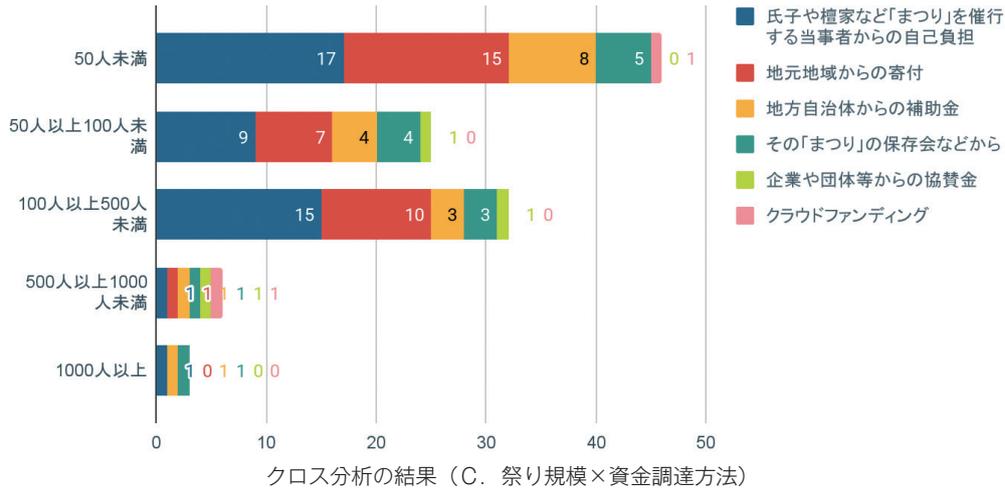
- 加入率八〇〜九〇% (最多層)
- 人手不足 (四十五件)、負担集中 (三十件)、理解不足 (二十一件)、新住民巻き込み困難 (十九件) が突出。
- 加入率六〇〜七〇%台
- 人手不足 (五〜六件)、負担集中 (三〜五件) など、課題認識が幅広く分布。
- 低加入率地域 (〜四〇%)
- 件数は少ないが、「資金不足」「女性参画制限」など多様な課題が散発的に出ている。
- 「わからない」回答 (九%)
- その中でも人手不足 (六件)、負担集中 (五件) が挙がっており、実態把握が不十分な地域でも共通課題がある。

**C. 祭り規模×資金調達方法**

- 五十人未満 (小規模祭り)
- 自己負担 (十七件)、寄付 (十五件) が中心。補助金 (八件) もあるが外部協力は少ない。
- 五十〜五〇〇人未満 (中規模祭り)
- 自己負担 (九〜十五件)、寄付 (七〜十件) が主要財源。補助金・保存会資金も少し利用。
- 五〇〇人以上 (大規模祭り)
- 自己負担に加え、補助金・保存会資金・協賛金・クラウドファンディングなど多様な調達源を活用している。
- まとめ・規模が大きいほど資金調達の多様化が



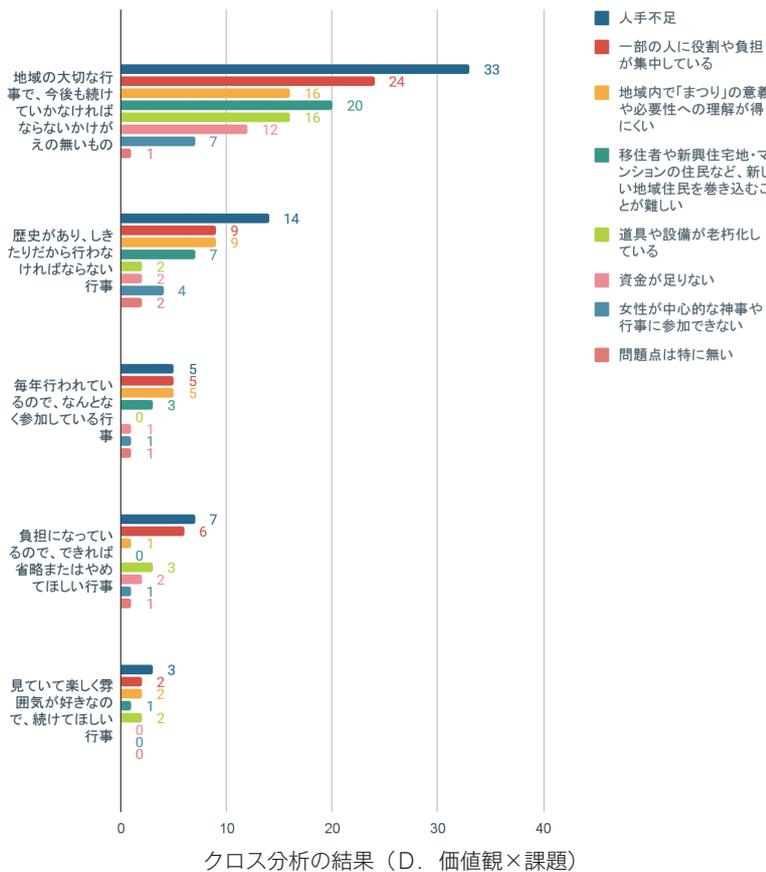
クロス分析の結果 (B. 自治会加入率×課題)



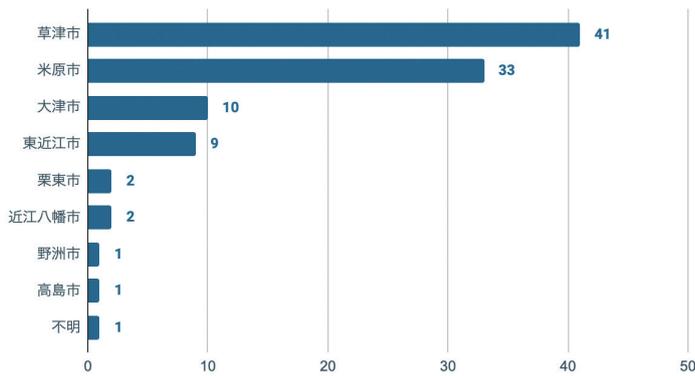
見られ、小規模は依然として「自己負担+寄付」への依存が強い。

D. 価値観×課題

- 「かけがえない行事」派 (四十二件)
  - 人手不足 (三十三件)、負担集中 (二十四件)、新住民巻き込み困難 (二十件) が突出。
  - 大切だと思う層でも深刻な課題を強く認識している。
- 「歴史・しきたり」派 (十八件)
  - 人手不足 (十四件)、負担集中 (九件)、理解不足 (九件) が中心。
  - 「なんとなく参加」派 (十件)
- 「少数ながら人手不足・負担集中 (各五件) と理解不足 (五件) を認識。
- 「負担なのでやめたい」派 (九件)
  - 人手不足 (七件)、負担集中 (六件)、道具老朽化 (三件) が明確。
- 「実際に「負担感」が強く結びついている。
- 「雰囲気が好き」派 (五件)
  - 人手不足 (三件)、負担集中 (二件) と、課題認識はやや少なめ。



E. 市町村別集計  
回答件数

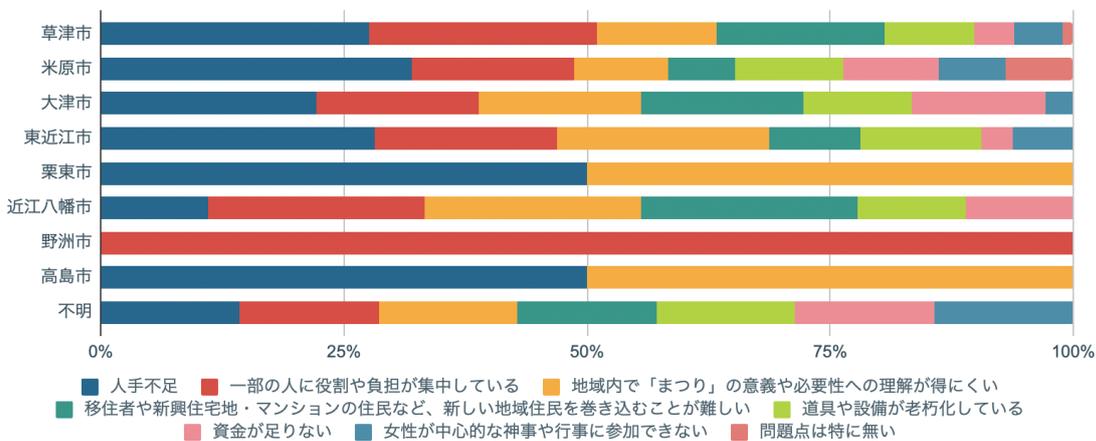


クロス分析の結果 (E. 市町村別集計 回答件数)

- 回答が多いのは草津市(四十一件)と米原市(三十三件)。両市で全体の約三／四を占めるため、この二市の傾向が全体像に強く影響している。
- 大津市(十件)、東近江市(九件)も一定数の回答があり、特徴が見える。
- その他の市町(栗東市、近江八幡市、野洲市、高島市)はサンプル数が少ないため、参考値として扱う必要がある。

市町村ごとの課題の特徴

- 草津市と米原市が主なサンプルであり、課題の傾向が鮮明に表れている。草津市は駅周辺の都市的地域では「新住民の巻き込み」「意義理解不足」が目立つ一方で、農村部も広く抱えており「人手不足」「老朽化」といった課題は米原市と大きく変わらない。多様な地域性が混在することが特徴である。
- 米原市は農村型の特徴が強く、「老朽化」「資金不足」が比較的多く見られる。ただし「問題なし」と答えるケースも一定数あり、地域ごとの差が比較的是っきりしている。
- 大津市・東近江市は複合的な課題を抱える(人手不足+負担集中+理解不足)。
- 米原市は「問題なし」も一定数あり、全体の多様性が比較的高い。
- サンプルが少ない地域は参考値としつつ、典型的な課題(人手不足、理解不足)は共通している。



クロス分析の結果 (E. 市町村別集計 市町村ごとの課題の特徴)

まとめ（クロス集計の総括）

● **人手不足と負担集中は全ての切り口で共通する最大の課題**

年代・加入率・規模・価値観・市町村いづれでも、人手不足が最も多く指摘され、その結果として一部に負担が集中する構造が浮き彫りとなった。

● **年代構成の偏りが課題の深刻さを増幅**

回答者の大半を占める六十〜七十代が強い危機感を抱いており、次世代の担い手不在が明確になっている。若年層の回答は少数だが、参加への距離感や負担感を敏感に指摘している。

● **回答者の年代偏りは「役割の担い手構造」を反映**

回答者の大半を占める六十〜七十代は、単に文化への関心が高いからではなく、自治会長や祭りの実務担当を担う役割が高齢者に集中している現状を示している。現役世代は多忙ゆえに役割を避け、結果として引退後の高齢者が担い手となる構造が全域で共通している。

● **祭り規模と資金基盤には明確な差がある**

小規模祭りは自己負担と寄付に強く依存し、持続性に限界がある。規模が大きい祭りでは補助金や協賛金など外部資源を取り込み、多様な資金調達を実現している。

● **価値観や地域性によって課題の表れ方が異なる**

「大切な行事」と考える層でも深刻な課題を認識しており、愛着と負担感が共存している。

市町村別では、草津市に見られる都市型の課題（新住民巻き込み、理解不足）と、米原市に見られる農村型の課題（老朽化、資金不足）が対照的で、地域性を踏まえた対応の必要性が示された。

自由記述

自由記載については、Google フォームに直接回答者が記入しているので、誤字・脱字等と思われるものはあえてそのまま掲載している。

（十八）あなたの地域の「まつり」は、今後どうなっ  
てほしいと思いますか。

改革しながら地域の中核になる行事となつてほしい。

拡大もせず縮小もせず現状維持。伝統文化として革新を進める世の中と共存できるものであってほしい。

サンヤレ踊り保存会に自治会会全員が入ればベストと思います。

継続。

続けていきたい。

担い手不足の時は神輿の巡行にこだわらず、町内会向けのイベントなどを考えるべき。

若い人達にも参加していただきたい。高齢化が問題。

歴史や伝統を受け継ぎながらも、地域住民の交流の機会として継承してほしい。

今とこれからの時代にとって意義があるなら続けてほしい。

伝統は継承しつつも個人に負担がかからないようにし、気軽に参加できる楽しい行事になってほしい。

新興住宅、マンションの方も気兼ねなく参加出来るといい。

継続してほしい。

継続。

地域の歴史・文化の一つとして、大切に次世代へ継承されてほしい。

続けてほしい。

地域の絆を深める機会で、安心安全に暮らせる住みよい街づくりには欠かせないものとして、大切に続けてほしい。

高齢者が増えているので、町内として集う場を提供して行きたい。

参加が増え賑わいあるものになるといい。

継続して欲しい。

自治会というよりも街として開催するのがよいと感じる。

わからない。

実家の親世代がおこないがあり大変そうだったからあまり良い印象はない。

地域住民が楽しみにする行事になってほしい。

今後も続けられると良い。

継続してほしい。

継続して欲しい。

若い人が、参加出来やすい、方法に変えてでも、残して欲しい。

神輿の担ぎ手が少なく人数を集めるのに苦労しています。

氏子だけでなく、住民全体としての祭り。

発展。

継続していく中で簡素化できるところは簡素化する。

続いてほしい。

多くの方々の参加を願う。

続けていきたい。

子孫まで継続して欲しい。

継続してほしい。

伝統文化を継承していくために、幅広く参加者の募集が出来る仕組みを構築する（祭り保存会など）。

継続して欲しいが簡素化が必要。

未永く続けていきたい。

近隣の若い方々の参加。

氏子区域の新興住宅地も巻き込んで、なんとか続けていきたい。

子供やたちにとってもワクワクする祭。

今後更に充実していかなければならない。

継続して頂きたい。

日本の文化 未来永劫。

子供のためにあれば良いが、高齢者の意見が前面にでるところがあり、両者の思いが解離している。子供の思いが反映されてほしい。

地域の連帯感を生むものであり、多くの方に参加いただきたい。

コロナ以前のような祭事が行えれば良い。ただどんな形であれ、継続出来る方法を氏子総代等か中心になって考えていけば良い。

もし可能なら、残せる祭りに復活したい：失くしてはいけない祭り。

継続。

伝統行事であり、今のかたちで継承してほしい。

昔と同じ事は出来ないことを理解して、地域が取り組める規模で存続できれば良い。

老若男女問わず、誰もが参加できる全員参加型の行事になってほしい。

六十年に一度の奇祭です。忘れてしまうので保存会を作り古き良き祭りを伝承すべく秋祭りとお節分祭で奉納しています。何とか続けるべく会員が奇数月に二時間練習をしています。皆さんがワイワイ・ガヤガヤと楽しんでいます。楽しむ事が祭りの良いところだと思います。

継続はして行つてほしいが 現状は難しい。

継続、より楽しく。

現状を維持して行きたい。

時代に即したやり方で行う。

今までどおりで、継続していつてほしいと思う。

縮小。

小規模にして継続して欲しい。

若い人も理解し継続して欲しい。

なんとか続けたい。

継続して続けたい。

(十九)「まつり」を催行するにあたってのコミュニティ

ティ(例えば、まつりの保存会や、町内会、自治会などの地域社会や団体)について何か思うことはありますか(大切なコミュニケーションであると思うかどうかなど、理由も含めて回答ください)。

神社の氏子としての意識も含めて、自治会、保存会 氏子組織が協力できる体制がほしい。

地下全体で祭が必要なものと言う認識がある。

サンヤレ踊り保存会は単独で存在していますが、自治会と連携すべきか迷うところです。単独は自由に行動できるが、自治会内では動きにくい。当面は単独が良いかな。

大事な藤樹先生の顕彰への地域の希薄化↓財団法人藤樹書院の事業になっている。

理解を得るのが難しい。

宗教も絡むので、なかなか積極的には言えないが、地域の行事として興味を持ってもらいたい。

古くからの住民と新規に転入された住民が、地域の歴史や文化に触れる行事を大切にしてほしい。

町内会の存在意義、町内会長の負荷軽減が深刻化しているので形を変えていかないと将来は無い。

高齢化が進み参加者が集まらない。

自治会メンバーは祭りに参加するには、上位団体に加盟しなければならず、人も出さなければならぬので、加盟はやめておこう、の意見が主である。現在も自治会で関わっている祭事と関わっていない祭事がある。宗教的な業者の為、関わる事に反対の意見も有る。

守る所は守り、変える所は時代に合わせて見直す  
勇気が大切。

町の繋がり。

世代の継続。地域から子供会が無くなり、子供世代や若い親世代を地域活動に巻き込む機会が逸している現状に危機感を強く感じていたところにコロナで拍車がかかる。改めて、行政も交え、マンションなどの既存の町内会に属さない世代も含めた仕掛けづくりの見直しが必要と考える。

町内会員の情報源収集とコミュニケーションの場であって欲しい。

今年初めて神輿委員会があると知った。学区内に住んでいるが存在を知らずにいたので、同じように知らない人も多いのでは？決まった人だけが関わるようになってくるのかもしれないので、広くつたえられるようになるのといいなと感じる。

地元の神社なので、町内会長として年間十位の催事に参加して負担が大きい。

町内会などで実施は役員の負担があると思うのでボランティア団体みたいなのが市であるとよいのではないかと思う。

住民同士で触れ合う機会が少なくなっているの  
出来れば続けて行けたら良いと思う。

しきたりにとらわれないにか新しいまつりなら  
興味はある。

特にありません。

自治会、町内会のボランティア協力という名のもとに行政アウトソーシングの下請け先となり、最低賃金から逸脱した異常な安価で行政に都合良く利用されている制度上の欠陥を改善した方が良い。改善できない場合、全国各地で各地域の「まつり」を担う膨大な数の自治会、町内会活動は順次縮小し終焉を迎えるように見受けられる。意図しているのか意図していないのか判らないが、地域の日本文化を衰退させたい行政の意向が見えている。

地域活性化のキーワードは、治田神社の例祭と夏祭りだと思っているので、今後の問題点、大人用神輿の軽量化（含む新調）。

若い世代に関心を持ってほしい。

若い人の参加が欲しい。

自治会が神輿を担当しているので大変です。

大切絆。

高齢化、共働きと参加が難しくなってきた。

自治会離れが不安。

町内に住んでいる以上は、まつりを通じてその場所の歴史と触れ合ってほしい。

継続してほしい。

必要だと思う。

まつり保存会は是非立ち上げていく。

改革が難しい。

町内の枠を越えてのコミュニティを確認いただける機会。

地域の各種の互助に役立っている。

祭を省略しようという方々が一定数おられるが、熱心に支えてくださる方もおられ、頼もしく思う。

地域コミュニティ活性化のツールとして利用してほしい。

保存会の立ち上げの必要性。

日本を正しく知る。愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。

様々な世代が集まってひとつになればよいが、今はそれがベストとも言えない。こうでなければという人が一定数おり、なかなか運営も難しい。

地域の協力体制、共助意識の高揚の為にも大切で  
す。

昔から、自治会や氏子総代等が中心となり、継続するための方法を模索している。神職とも意思疎通を図りながら、区民の意見反映もして継続することが大切だと思っている。

子供たちが少なく成り、帯掛け祭りやケンケト祭りを見た事が無い子供がほとんどです！他に類を見ない祭りなので復活させたい！そう思う人と、力が欲しいです。

最近では、地域のコミュニティが薄れていると思われる。せめて伝統行事であるまつりを通じてつながりを持ってもらえたらよいのではないか。

仕事为主体であり、ほぼ関係役員と一部の団体で事業計画を消化している感じです。私もそうですが、今後さらにまつりの意義等薄れていく様に感じています。

特定の人しか参加出来ないのが現状なので、出店なども設け、盛り上がりのある、人の集まるような催事にしていきたい。

冊子を作り、コミセンの広報にも会員募集したり学校など参加を願っていきますが、なかなか。積極性が乏しい。

新興団地の祭りに対する理解が希薄である。

大人による角力踊り保存会が位置づけられているが、新しく保存会に入る人の確保が問題と聞いている。歴史ある祭りの継続について考えさせられることである。

みんなが集まれる場として必要。

高齢化が進み今後どのようなようになっていくのか心配。

地域住民が集まれる場がコロナ禍以降かなり少なくなってしまった。このようなまつりは続けて欲しい。

大切。

地域住民が集う大切なコミュニティの場である。ふれあいの場が今日は少なくなり希薄なムードがある様子が伺われる。

近隣互助の観点からも、むすびつきが必要。

一体は無理。

高齢化になり先が不安。

人口減少によりコミュニティを維持することが困難。

無理して続ける必要はない。

地域の交流、団結力に貢献。

世代間交流を図り、広く発信してゆくべき。

自治会内のコミュニティの場としては必要だが、自治会が機能しないと継続できない。

(二十) その他、「まつり」に関して思うところがあればご記入ください

まつりの意義や歴史 課題などがまとめられ、神社との関係が検討される必要があると思う。

合理的に割り切れないものは何か別のもののせいにしてきた日本人。神の崇りだと祭礼を行ってきた経緯があるが、科学が発展してきたことの表裏で神に対するの信仰心は減ってきている。

古来まつりには地域安全や豊作祈願など安定した暮らしを願う人々の祈りが込められており地域の活力の源として大きな役割を果たしていました。サンヤレ踊りの復活も旧来住民と新しく移り住んだ住民との交流も含め地域の活力の源になることを目指していました。コロナでまつりが休止した後の再開もスムーズに進みましたが自治会子ども会の子供神輿が再開せずにはいきました。サンヤレ踊り保存会は自治会、子ども会と協力し子供神輿再開に一役を果たしました。サンヤレ踊り保存会会員の多くは四十歳代で、一般的にあまり地域活動に関わっていない年齢ですが子供神輿の再開に関わったことは今後の地域活動の活性化につながると思います。

儒式祭典は、一般でいう「祭りではないのですが、祭典ということ、なんとなく回答しました。

県や市ももっとサンヤレ踊りだけではなく、地域の小さな伝統的な祭りのPRを行ってほしい。

非科学的なことは置いておいて、なぜ引き継いでいくことが必要で、地域社会にどうメリットや影響があるのか知りたい。

是非、続いて欲しいものです。神社の神輿はかき手が減りつつあるだろうから、新興住宅の間間は是非活用すべき。実家のほうの兵主祭りも人がおらず、かき番の地区が五年周期で回ったが、地区合同で人確保にしきたり変更で対応したと聞く。柔軟対応しないと、廃れて消えるしかない。参加はしないが観るのは見たい、という人が増えているように思う。

町内会費で神社の祭礼費用を出費することが違法かどうか。まつりは宗教行事か。

人が往来する地域力の向上には、祭はじめ、人が集まる企画が大切。

まつりや古い町並みは、止めたり壊したらそれまで。地域の大切な歴史文化として、宝として、次世代へ繋げて行きたいものです。

以上、二件目の回答入力ですが、宜しくお願い致します。草津学区二十五町内会で一番高齢化率が高い町内会ですが、少しずつ二世帯、三世帯住宅が増えてきました。小学生以下0人の最悪状態を脱し、現在は小中学生が三人、来年は小一生が二人増える予定です。この一年で新生児も二人誕生しました。

現在、町内の住民は戦前戦中と戦後世代が丁度半分ずつで、高齢化による世代交代が更に進むと思われれます。

昔、わたしが子ども時代に参加した子ども神輿は楽しい思い出になっている。今の子ども達にもより多く参加できるものになるといいなあと感じます。

若者への情宣を最検討すべき。

いろんな世代が記憶の中の思い出として残るような質であればやるといいと思う。各自自治体参加者数など反映されて範囲を増やすなど変われば良いと思う。

子供が少なくなると、祭りを続けて行くという気持ちもだんだんと萎えて来る。

おこない：神社の行事：田舎の親が多額の寄付をし、代々行っているのを子どもながらに見てきました。今の時代にそぐわないと思う反面、なにもなくなるのは寂しいけれども、これも時代なのかとも思います。

治田神社ではいまでは数少ない「山の神」の神事で「蛇緋い」をいまでも継承しています（毎年一月第二日曜）。

地域が纏まるきっかけになる祭りであってほしい。特に今の時代だから尚更必要だと思う。地域コミュニティ作りの大切な入り口である。行政が祭り運営にサポートが必要である。

申し訳ありませんが当自治体は六世帯でありそう言う活動は行っていません。

継続してほしい。

文化として残して行きたい。

まつりの起源は古からその地域の人が伝えてきたが、住人は入れ替わり伝統文化に触れる機会も少なくなってきた。誰でも参加し易いまつりの催行、見て楽しい形にしていければ伝統文化の継承につながると思う。

自治会組織の崩壊が近隣自治会にておきており、祭りに関わっている自治会の高齢化。

仰木の祭はなんとか続けてこられたが、近隣集落の祭はコロナを機に辞めてしまったところも多く残念に思う。

自然の恵みに感謝する、その場所が神社であって、その感謝を表現することこそが「まつりごと」を行うという古来から伝わる日本固有の文化。まつりは、自国の歴史を正しく学ぶことに他ならない。

今はニュースをみても大変さを感じてしまう。

けど、しんどい。事務手続き等が。

子供に取って、お正月と祭りは一番の楽しみでした。

祭だけに限らず個人、個人が余裕がなく日々忙しいため、わずらわしく感じ、後まわしになっている！

どの町を見てもコロナで中止となり、元に戻そうとするように見受ける。地域の氏神は神輿に乗り住民みんなに元氣か、頑張れよ、氣をつけてね、とお声をかけていただいていると思う。

やはり自治会の最大行事でもあり派手にする必要は無いが、現状を維持して行きたいと思えます。

ふれあいの機会。

地域の行事が少なくなっているので、小規模でも継続していければいいと思う。

時代が変わっても時代にあった方法で続けて欲しい。

年中行事だが人手不足が課題。

少子高齢化でこの地域もまつりが少なくなってしまうと思いますが、地域住民が集まれ場として長く続けられ事を望みます。

資金があれば、神輿等製作し、盛大にしたい。

割り切りも必要。

むかしは各家庭で提灯を出して、ご馳走していたように思いますが、もう昔の話になってしまった。時代に合わせたものに変えて行くべき。

転入者参加に、理解頂けない。

保存会会長の立場として、みんなが参加しようというものにしていきたい。

## 第二章 二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言

### 二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言の原案

二〇二五年七月～八月に実施したアンケート調査と、二度開催した「文化・経済サロン」、そして「文化ビジネス塾（シンポジウム）」を実施し、それらをもとにして、二〇二五年の提言を作成した。

・以下が提言の原案である

令和八年（二〇二六年）

文化・経済フォーラム滋賀「提言」

近江のまつりの今とこれから

「共創の場」の再定義 地域文化としてのまつりの継承に向けて―

はじめに 混迷する現代社会における「地域の

文化」の価値

現代の日本社会は、急速な近代化、グローバル経済中心主義を経て、今やAI技術の飛躍的発展という波の中に揉まれている。その代償として環境破壊、人間の欠落、さらには地域コミュニティの崩壊という深刻な課題に直面している。私たちは、かつてないほど豊かで便利な生活を手に入れた一方で、自らが生活する大切な「場所」の感覚や、他者との深い絆といった

幸せの基盤を見失いつつあるのではないだろうか。

こうした閉塞感を打破する鍵は、実は私たちが暮らす「地域社会」にある。かつて、柳田國男、南方熊楠、折口信夫ら先駆的な民俗学者が、明治期の急速な西洋化に警鐘を鳴らし、日本人が本来持っていた心や風習の再認識を訴えた精神を、今こそ再評価するべきではなからうか。

今回の提言では、文化・経済フォーラム滋賀としての視点に立ち、地域コミュニティの核である「まつり（祭礼や民俗行事）」が直面している現状を分析し、持続可能な滋賀の地域社会の未来に向けた提言を行いたい。

## (二) 日本の「まつり」が果たす精神的・社会的機能

古来、日本の「まつり」とは単なる地域のイベントや観光行事ではない。それは、日本人の精神構造、自然観、そして共同体の維持システムが凝縮された「聖なる秩序を共有する装置」である。

民俗学的知見によれば、まつりは「日常」と「非日常」を切り替える重要なリズムである。柳田國男が説いたように、絶え間ない労働によって生命力が枯渇した状態（ケガレ<sup>ケガレ</sup>）が枯れる（直会）し、エネルギーを充填することで回復させる。これは個人の精神的な再生であると

同時に、地域社会（コミュニティ）の持続を担保する不可欠なプロセスであった。

また、折口信夫はまつりの核心を、外部から訪れる聖なる存在「マレビト」との交流や、魂を活性化させる「たまふり」にあるとした。さらに構造主義的視点に立てば、まつりは「自然と人間」「聖と俗」といった対立する概念を、神輿の巡行などを通して一時的に混じり合わせ、混沌の中から日常の「秩序」を再確認させる機能を持つ。

社会的な側面では、マルセル・モースの「贈与論」に通じる互酬性・相互扶助の確認の場でもある。まつりにおける寄付や奉仕は、目に見えない絆を醸成し、精神的身体的健康や他者との関係性など、地域のレジリエンスを支える基盤となってきたのである。

## (二) 滋賀県における「まつり」の現状—アンケート調査が示す危機と希望—

しかし、こうした深遠な意義を持つ近江のまつりが、いま重大な岐路に立たされている。令和七年度に実施（七月・八月）された「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査（回答数一〇三件）の結果は、現場の疲弊を克明に示している。

まず、まつりを支える中心層は六十歳代が半数を占めており、次世代への継承が急務であることが裏付けられた。自治会加入率の低下も顕

著であり、特に大津市などの都市部や新興住宅地では五〇〜六〇%に留まっている。特筆すべきは、まつり催行の問題点として、資金不足（十九件）よりも圧倒的に「人手不足（七十一件）」が挙げられている点である。また、「一部の人が役割や負担が集中している（五十一件）」という現状があり、特定個人の過度な献身に依存した体制の限界が露呈している。

さらに、コロナ禍は地域の伝統に深い爪痕を残した。一度中止や簡略化を余儀なくされた神事や芸能は、再開が困難になるケースが多い。例えば、地蔵盆をはじめとする各地の民俗行事は、二〇二五年現在、多くの地域で自治会役員のための法要へと縮小され、住民交流の場としての機能が消失しつつある。一度「まつり」を省略する方向に舵を切れば、伝承されてきた技術や「畏敬の念」は急速に失われていくのである。

一方で、回答者の五〇%が「地域の大切な行事で、今後も続けていかなければならないかえがえのないもの」と回答しており、困難な状況下にあっても、まつりを地域の誇りとして残したいという強い意志が共有されていることも事実である。

## (三) 持続可能な継承に向けた「まつりの再定義（アップデート）」

まつりの存続危機を乗り越えるためには、単なる「形式の保存」から脱却し、現代の生活感

覚に合わせた「まつりの意義の再定義」が必要である。

①担い手構造を「血縁・地縁」から「系縁<sup>けいえん</sup>」へ  
転換

伝統的な「氏子」という閉鎖的な枠組みを超え、外部からの「関係人口」として、ボランティア（外国人を含む）、中高校の生徒、大学生、専門学校生、海外からの留学生などを積極的に取り込む仕組み作りが不可欠である。実際に、一部の地域ではクラウドファンディングによる外部からの資金調達や、他地域の自治会との協力によって担ぎ手を確保するなど、新しい共助の形が芽生えている。

②「保存」に固執せず「変容」を許容する

戦後に活躍した民俗学者宮本常一が説いたように、民俗文化は生活の変化とともに変わっていくのが自然な姿である。神輿の担ぎ手が足りなければ台車を使用する、露店にキッチンカーを導入する、女性や移住者の役割を積極的に拡大するなどしながらも、最も大切な行事を残すために、時代にあった「生きている文化」としてルールを組み替える勇気が求められる。

③行政や観光客主導の「イベント」ではなく、住民の「当事者意識」を持つ

コロナ禍での中断は、これまで続けてきた伝

統的な風習を振り返る機会となり、結果として、形式的な儀礼のみを残すことになった。最も大切な、みんなで楽しむ行事が、人々の接触の機会を無くすという目的のもとに、中止となってしまった。中には、形だけの中途半端な行事として、コロナ禍を理由にやめてしまうというケースもあったかもしれない。まつりは楽しく盛り上がるものでなくてはならない。まつりに関わる個々が主体性を持ち、何よりも当事者が「楽しむ」ことができる環境をデザインすることが、持続可能性の根源となる。

④「畏敬の念」の再考、まつりの本質を共有する

日本のまつりの本質は、自然の恵みや、人間の力ではどうにもできない運命的な存在に対する「感謝」と「敬意」にある。効率や合理性のみを追求し、すべてを科学で説明できると思いあがる現代社会において、この「畏敬の念」こそが、私たちの傲慢さを戒め、他者や自然と共に謙虚に生きるための指針となる。

戦後、私たちが物質的な豊かさを追い求める過程で置き去りにしてきた「日本の心」を、まつりという体験を通じて次世代と共に体感すること。大人たちが真剣に祈り、熱狂し、共に汗を流す姿を子供たちに見せること。それこそが、単なる行事の継承を超えた、最も価値ある「地域文化の伝承」である。「畏敬の念」を抱き、地域の暮らしを慈しむ。このシンブルで、最も

大切な心のあり方を、近江のまつりを通じて次の世代へと繋いでいくことが求められる。

まとめ 継承のために最も大切なこと―「共創の場」をつくる

文化と経済は決して対立するものではない。地域の文化的な豊かさが住民の誇りを育み、その誇りが地域の魅力を高め、新たな経済の活力（人流や共創）を生み出す。

私たちは、近江の地に受け継がれてきた「まつり」を、過去の貴重な地域文化遺産として守り、繋ぐだけでなく、移住者や他地域の住民を巻き込み、時代に合わせた変容を受け入れ、当事者が楽しむ仕組みをつくり、そして、日本の心である「畏敬の念」を後世へ伝えなければならぬ。そのために「まつり」という大切な地域の行事を、未来の持続可能な地域社会を支える「共創の場」として再定義し、未来へと繋いでいく決意を新たにす。「共創の場」とは、企業、行政、大学、各種団体、NPO、個人など異なる背景を持つ人々が境界を超えて集まる場であり、多様な人々が、人口減少や環境、防災など大小様々な地域の課題に真摯に向き合い、解決に向けて動き出す機会となる。

ある一つの地域で暮らす人々は、職業や家族構成、趣味など全く異なった背景をそれぞれが持つ。そういう個性的な人々が、「まつり」という行事でつながる。これはまさに有機的な共

創の場であるに違いない。それぞれ違った経験知を持つ人々が集まることによって、新しい地域づくりにつながる可能性が生まれ、同時に多様な人々がお互いを思いやることで濃密な相互扶助の仕組みが自然にかたちづくられる。

近江のまつりを支える各地域の事情は、個々に異なるため、一律に「まつり」の最善のあり方を提案することは不可能である。しかし、今、積極的に「まつり」のあり方を真剣に考える時が来ている。地域に暮らす人々が当事者となつて、「まつり」をこの時代に生きる行事として繋げていくために知恵を絞る、そのことを丁寧 に伝えていくことが、今、私たちに課せられた最大の責務であると考えている。

(令和七年度提言研究事業コーディネーター  
文化・経済フォーラム滋賀 幹事 成安造形大  
学芸術学部教授附属近江学研究所副所長 加  
藤賢治)

二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言発表  
この提言を、二〇二六年二月二十三日(月・祝)  
の文化・経済フォーラム滋賀第十六回総会にて、担  
当者である筆者が、「まつり」写真などをスライド  
に入れて、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール小ホール  
にて発表した。

## まとめ

筆者は、近江で宗教民俗を研究する中で、さまざま  
な民俗行事と出会い、そこで多くの人の繋がりを  
眺めてきた。民俗行事は、その規模の大小はあれど  
も、個人が一人で完結するものは一つも無い。複数  
の人々が、見返りを求めない絶対的な奉仕の気持ち  
を伴って協力し、成り立っている。そこには、精神  
的身体的な健康につながる「拠り所」という存在や、  
「畏敬の念」という大切な要素を伴っている。そして、  
そこにしか存在しないというかけがえない地域文  
化が見られ、地域のアイデンティティとして大切に  
守られている。また、そのまつりが行われる地域に  
は、個々の生業を超えてさまざまな人々が交流する  
貴重な「共創の場」であることも確認された。

大切なことは、このまつりは、当事者であるその  
地域の人々が主体となつて、楽しく、積極的に運営  
がされねば続かない。第三者である我々が外側から、  
「大切な行事なので続けてほしい」とどれだけ言葉  
を重ねても、その存続に何の効力も無い。

しかし、我々民俗研究者ができることは、可能な  
限り丁寧なまつりや民俗行事の意義を、ことあるご  
とに現場で語り続けることしかできない。その実践  
が、どこかで響き、伝統継承の少しでも助けになれ  
ばと思うのである。

## 注釈

1.

文化・経済フォーラム滋賀は「文化で滋賀を元気に！」  
を合言葉に、産官学民の各分野で活躍している人たちが  
集まり発足した会員制の団体。「分野を超えて交流  
を深め、経済と文化の活性化に会員皆様のお力をお借  
りし、文化の薫り高い滋賀県の将来を築きたい」とい  
う誓いをもとに、さまざまな「文化で滋賀を元気に！」  
する活動に取り組んでいる。

2.

第一回 近江のまつりの課題と展望①(近江のまつり  
の今とこれから 大津祭を対象に)  
日時…令和七年七月九日(水) 十四時から十六時  
場所…滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール研修室  
講師…木津勝氏(大津市歴史博物館副館長)  
船橋寛明氏(大津祭曳山連盟理事長)  
コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、  
文化・経済フォーラム滋賀幹事)

第二回 近江のまつりの課題と展望②(近江のまつり  
の今とこれから 鎮守の神のまつりの今とこ  
れから)

日時…令和七年九月十七日(水) 十四時から十六時  
場所…滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール研修室  
講師…市川秀之氏(滋賀県立大学教授)

3.

コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、  
文化・経済フォーラム滋賀幹事)  
第十八回文化ビジネス塾「近江のまつりの今とこれか  
ら」地域文化と経済の好循環を目指して①  
日時…令和七年十一月三日(月・祝) 十四時から十六時  
場所…滋賀県立文化産業交流会館 第一会議室  
司会…高梨純次氏(公益財団法人秀明文化財団 理事  
文化・経済フォーラム滋賀幹事)  
パネラー…市川秀之(滋賀県立大学教授)  
高橋順之(伊吹山文化資料館学芸員)  
對馬佳菜子(地域文化コーディネーター)

コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、

参考文献

- ・『まつりは守れるか —無形の民俗文化財の保護をめぐる—』  
石垣悟編著 八千代出版株式会社 二〇二二年
- ・『看取られる神社 —変わりゆく聖地のゆくえ』嶋田奈穂子  
著 (株)あいらり出版 二〇二四年
- ・『湖国と文化』一六八号「特集 近江の祭り 現在と未来」(公  
財)びわ湖芸術文化財団 二〇一九年
- ・『文化誌「近江学」十三号 祭り—よりどころ 成安造形大  
学附属近江学研究所編 サンライズ出版株式会社 二〇二二  
年